

ヨブ記1章20-21節 「取られる主」

1A 礼拝した

2A 裸

1B 出てくる

2B 帰る

3A 主権者なる神

1B 与えられる主

2B 取られる方

4A 主の御名

本文

ヨブ記1章 20-21 節をご覧ください、私たちの聖書通読の学びはついにヨブ記に入ります。午後
にヨブ記1-3章を一節ずつ読んでいきます。今朝は1章 20-21 節に注目してください。

20 このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、21 そし
て言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られ
る。主の御名はほむべきかな。」

私たちはこれから、詩歌と呼ばれる箇所を学びます。これまでは歴史書であり、イスラエルの歴
史によって神がどのように働いてくださっているか、その客観的な事実によって神との関係を見て
きました。これからは、その神に対する自分の関係を、いろいろな感情表現によって言い表してい
る「詩歌」と呼ばれるものを読んでいきます。ヨブ記から始まり、詩篇、箴言、伝道者の書、そして
雅歌です。

私たちが神に対して抱いている感情、その中で私たちが最も困難に思うことが、「なぜ苦しみに
遭うのか」ということであります。ちょっとした小さな試練から、生死をさまようような大きな試練に
至るまで、「どうしてこのような苦しみに遭うのか」という問いは、いつも続きます。そして、苦しみ遭
う毎に、原因を探ろうとする自分自身を発見します。

預言者エリヤがシドンにいるやもめの女から、こんなことを言われました。「あなたは私の罪を
思い知らせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。(1列王 17:18)」彼女は食べ物がなく、
自分の息子と最後の食事をして死のうと思っていました。ところが、エリヤが奇跡を行って、飢
饉が過ぎるまで、かめの粉と油の壺がなくならないようにしました。ところがその男の子が、突然、
重い病気にかかって死んでしまったのです。そこでこの女の反応が、自分の過去の罪を思い起こ
させるために、こんなことをさせたのかと言って責めたのです。人間の中に、このような因果応報

的な考えが DNA のように組み込まれています。

しかし、その可能性をいっさい排除するのが、このヨブ記であります。ヨブは、「潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。(1 節)」とあります。彼は大富豪だったのですが、しかし、息子や娘たちが祝宴を行って、その一日の終わりに、一人一人のために動物のいけにえを捧げました。「もしかすると、神を呪うようなことを心の中で思ったかもしれない。」と心配したからです。それだけ、ヨブは神を畏れ敬っていました。それにも関わらず、ヨブは私たち人間の中でこんな悲劇があつて良いのかという試練に遭います。一日のうちに、ヨブのところでは仕えている若い者たちが殺されました。その知らせが来たら、放牧の家畜が一気に天からの火によって殺されました。それから、大風が吹いて、息子や娘たちが祝宴を開いていた家が壊れて、つぶされて死んでしまったのです。このことが、一度に襲ってきたのです。こんな悲劇があるのか？というぐらいの悲劇です。

これらのことが一日のうちに襲った後で、そこまで座っていたヨブが立ち上がって行なったのが、今の行為です。彼は礼拝して、「私は裸で生まれたのだから、裸で戻るのだ。主は与え、主は取られる。主の名はほむべきかな。」と言いました。「なぜ苦しみがあるのか。」という問いに対して、ヨブは明確に答えを持っていました。「主は与えるだけでなく、取られる方であるのだ」と。神が自分の命に対して主権を持っているのだ、ということです。

ヨブ記は、非常に重いテーマです。しかし、私たちがなぜ生きているのか、その命の根源にそのまま触れている書物であります。私たちは日々の生活を、表面的に生きています。持ち物であったり、人からの評価であったり、自分が成し遂げた成果であったり、そのようなもので日々をやりくりしています。けれども、苦しみに遭う時にこそ、自分の命についての、明確な解答を得ることができるのです。周囲で起こっている事柄に左右されることのない、確固たる揺るがぬ霊を持つことができるからです。

1A 礼拝した

まず 20 節に注目してください、「ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し…」とあります。ヨブは、族長でした。僕たちがやって来て、座っている自分に対して、外で何が起きているかの報告を聞きます。信じられない、恐怖に満ちた知らせが次々にやってきます。そして自分の息子たち、娘たちが死んだ知らせを受けた時に、彼はついに立ち上がりました。

「上着を裂いて、頭を剃る」のは、当時、悲しみや嘆きを表す当時の人たちの表現です。ヨブはこれから、主が取られる方だとしてこの方の名をほめたたえますが、それが、自分の失ったものを悲しむ気持ちがなく、それを押し殺していたのではないことを知る必要があります。神の主権を受け入れることは、自分の心を冷たくすることではありません。

自分が大切にしているものを失った時に、それを悲しみ嘆きことは、決して恥ずべきことではあ

りません。聖書の舞台の中東の人たちは、まさにヨブと同じような全身で悲しみを表現しますが、私たちに身近なところで見てみましょう。韓国の船の沈没で、残されたご両親たちの嘆き悲しみをテレビ映像でご覧になったと思います。日本人はそこまでしないだろうと思います。しかし、幼い子がわがままを言って、だだをこねているように泣いている、あの姿は実は神の前に正しいのです。神は元々、人が死ぬように造られませんでした。イエス様が、ラザロの死に対して涙を流され、心に憤りを抱かれた程でした。

しかしここでヨブは、「地にひれ伏して礼拝し」とあります。礼拝するという言葉を私たち教会は使いますが、改めてこの意味を考えてみたいと思います。目に見えてもっとも分かりやすいのは、「地にひれ伏す」という言葉です。私たち日本人は「深くお礼をする」というのが、最も大きな敬意の示し方になります。けれども、地にひれ伏すというのは、それ以上です。イスラム教徒のそれが、当時の礼拝の伝統を引き継いでいます。完全に寝そべるのです。日本人は、これはとても難しいと思います。「土下座する」のに、私たちはどれだけの苦労をするでしょうか。深くおじぎをして謝罪をしたとしても、自分の面子を保ちながら頭を垂れています。しかし土下座は違いますね。完全に屈服することです。

しかし、これが、いやそれ以上のものが礼拝であります。自分の持っている大切なもの、自分の誇りとするものを投げ出します。自分の強い意志を自分自身で叩き落とし、主権者の前でひれ伏します。それはちょうど、ヤイロのようです。会堂管理者という職にある人でした。会堂管理者と言っても、会堂の建物を管理しているのではなく、律法全体を管理している、すなわち宗教的に高い地位に着いている人でした。他のパリサイ人や律法学者はイエスが行われることに対して、自分たちの解釈を無視するものだったので腹を立てていましたが、そのようなことも投げ捨てて、ヤイロはイエス様の足元でひれ伏しました(マルコ 5:22)。自分の娘が死にかけていたからです。

そして、ペテロが召命を受けた時もそうでした。彼は一晩中漁をしても一匹もとれませんでした。けれどもイエス様が、舟を深みに漕ぎ出し、そこで網を降ろしなさいと言われました。「一匹もとれなかったけれども、お言葉通りにしてみましょう。」と言って降ろしたら、舟二そうが沈むほど魚がとれました。その時にペテロは、イエスの足元にひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。(ルカ 5:8)」と言いました。ペテロにとって、自分の一部になっていた、自分の価値を証明していた漁という職業が、主イエス・キリストの前で完全に打ち砕かれました。このように礼拝とは、自分の大切なもの、拠り頼んでいるもの、それらを投げ出すのです。ヨブも同じように、自分に与えられた富、しもべ、そして息子、娘たちが取られた後に、主の前にひれ伏しました。

2A 裸

そしてヨブの告白は、核心に迫ります。

1B 出てくる

21 節で、「私は裸で母の胎から出て来た。」とあります。生まれた時は、何も持っていませんでした。ヨブは今でこそ、十人の息子と娘、二千頭の家畜、そして数多くの僕がいました。そして彼は族長であり、長老であり、人々から敬われた人です。しかし、それらは付随しているものであり、ヨブ自身を形造っているものではないのです。しかし人間は、自分の持っているもの、自分の手で得たものが自分自身を形成していると思ってしまいます。したがって、何か大切にしているものを失った時に、自分の存在が揺るがされるのです。

私の場合は、宣教地の行く前にその直前に、目が物貰いのように真っ赤になったことがあります。ものすごく赤くなって、腫れ上がって、私は自分の目がこれで治らないのではないかとふと思いました。けれども、聖書本文を見つめるその目がなければ、どうやって聖書を教えることができるでしょうか？しかし聖書を教えることは、私が生まれてきた時に備わっていたものではありません。その後で付随して与えられた神からの賜物です。したがって、取られても自分が失われる訳ではないのです。

私たちは、付随しているものを必死で自分の手で、自分の力で保っていることによって生きています。しかし神を知るには、元々自分は全く何もできないところで、神が動かしておられたことに気づく時に、神を知ることができます。母親の胎の中にいる時に、自分が成し遂げたものは何かあるでしょうか？ダビデは詩篇でこう歌っています。「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。(139:13-16)」

ヘブル語で「全能者の神」は、「エル・シャダイ」と言います。「シャダイ」の元々の意味は「お乳を与える」という意味です。乳児がお母さんのお乳を飲むことを、ご自分の名前に神はなさっているのです。なぜか？全能の神であれば、どうして私に力を現さないのか、と挑戦する人が多いですが、神は、人が赤ん坊のように全く依存しなければいけないと知って抛り頼むようにさせて、それでご自分の力を現されるのです。

2B 帰る

そしてヨブは、「また、裸で私はかしこに帰ろう。」と言います。これは、母の胎に戻るということではなく、地に戻る、そして陰府に下るということです。伝道者の書において、「ちりはもとあつた地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。(12:7)」とあります。しばしば言われる、「墓場には何も持っていくことはできない。」ということ。伝道者の書では、持ち物だけでなく、名声さえも、自分の死んだ後には後継者らがすることによって忘れ去られることを話しています。これは現実であり、私

たちは赤ん坊の時と同じように、ただ自分のこの体だけしか持っていくことができず、そして死ぬときはこの体でさえ塵に帰るので、持っていくことはできません。

しかし、その最後の姿に人間の本質があり、尊厳があります。同じく伝道者の書に、こうあります。「祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。(7:2)」

皆さんは、結婚式と葬式はどちらに出席したいですか。クリスチャンの結婚式と葬式に限定して構いません。どちらに参席するのに、ワクワクしますか？私は変な人間かもしれませんが、あるいは歳を少し取ったからかもしれませんが、結婚式よりも葬儀のほうがワクワクします。結婚式は出発点でありゴール、目標ではないことを、結婚しているので知っているからでしょう。(けれども、もちろん、喜んで結婚式に参加しますので、結婚される方は招待してください！)私は間もなく結婚して21年経ちます。この結婚を死ぬ時まで大切にすることこそが意義あることであり、21年前の結婚式は始まりに過ぎなかったからです。

しかし葬儀は違います。マラソンで出発点を切る姿ではなく、ゴールに入っていく選手の姿が美しいように、その古びた体を見る時に、敬礼をしたくなるような尊厳に包まれます。自分が、自分の死ぬとき、あるいはイエス様が天から戻ってこられる時、この時を出発点として今の自分が生きているのだと分かるからです。このことを悟る時に、自分が執着しているものを手放さなければいけないことを知ります。それは意味がないからです。ただ主に対して行なったことのみが、後の世にも持っていくことができるものだからです。

3A 主権者なる神

そしてヨブは、大胆な信仰の宣言をします。「主は与え、主は取られる。」です。

1B 与えられる主

まず、「主は与える」ことから考えてみましょう。私たちは、自分が母の胎から出てくる時は裸で、同じように地に帰ることを知っているならば、その他の良きものは全て神から来ていることを知っています。「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。(ヤコブ 1:17)」ですから、私たちは高ぶることはできません。けれども、どうしても自分が何かをしたかのように高ぶってしまいます。「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。(1コリント 4:7)」

2B 取られる方

そして、次が私たちの信仰が試される場所です。「主は取られる。」与えられる時には、私たちの信仰は、どれだけの真価があるのかはつきり見ることはできません。表向きは、みな同じよ

うにすばらしいように見えます。けれども、先ほど話したように、裸で母の胎から生まれ、そのまま地の塵に帰るといことが本質であります。そしてキリスト者は、イエス様が悪霊を追い出して戻ってきた弟子たちに対して、「あなたの名が天に記されていることを喜びなさい」と言われたように、そこに私たちの存在価値が置かれています。けれども、与えられている時はそれを意識的に言い、見せていないと、いつの間にか目に見える祝福で埋もれていってしまいます。しかし、主が取られる時に本当の姿が表れてくるのです。

この中で、与えられることによって信仰を持たれた方はどれだけおられるでしょうか？それとも、取られたことによって信仰が与えられましたか？与えられたということによって信仰に導かれる人も、もちろんいます。イエス様が地上におられた時には、まさにその働きでした。捕らわれていた者が解放されました。病んでいたものが癒されました。しかし、そのように自分が捕らわれの身であった、病んでいた、貧しいという心の窮乏があつてこそ、与えられたことを感謝して、主にほめ歌うことができます。このような働きでさえ、十人のらい病人がイエス様のところにやってきて、それのみなが癒されたのですが、イエス様のところに戻ってひれ伏したのは、たった一人のサマリヤ人でありました(ルカ 17:11-19)。

むしろ、私たちは、取られた時に、自分の真実を見つめることができ、そして神を知ったのではないのでしょうか？自分が悔い改める時には、自分の得意とするもの、当たり前のように自分のものだと思っていたもの、努力してきたもの、こうしたものが取られたのではないのでしょうか？そして、信仰を持った後でも、善を行っていても取られることがあります。けれども、取られた時こそ、主ご自身に会うことができます。モーセはエジプトでの君子という地位を取られて、羊飼いになって四十年経った時に、燃える柴にて主の現われを見るに預かったのです。

4A 主の御名

そしてヨブはこう言いました。「主の御名はほむべきかな。」

ヨブは、根本的な部分において主をほめたたえることができました。自分に神が何かをしてくれたから、それで主をほめたたえたものではありません。主は与え、また取られるという、神の主権に応答して、主をほめたたえます。神が神であるがゆえに、主をほめたたえるのです。このことのできている信仰は、本当の意味で主ご自身に会うことができている人です。主との歩みが安定している人です。成熟した人です。

私たちは、神の善でさえも自分の既得権にしてしまうことがあります。神は愛です。けれども、神が自分を愛してくださったと感じられない時は賛美が出てこないということであれば、神に自分を愛せという要求をしているからに他なりません。神は、祝福もするが災いも創造できる方であることを知っていて、なおのこと神が慈しみ深く、私たちの罪を豊かに赦し、恵みで満たしてくださることを知るのです。私の心に神への賛美がなくなっている、神の愛が分からなくなっている時、心を吟

味する必要があるでしょう。裸になっていない自分がある。何か他に「これは私のものだ」と主張しているものがある。神は豊かに施してくださいますが、「施して下さることを条件に、私はあなたを賛美します。」というような態度になっている時、私たちの心からは、賛美は出てきません。

神を神としてほめたたえる人々の間に、神はご自分の力を現されるのです。パウロとシラスがピリピに宣教旅行に行った時のことを思い出してください。パウロは、占いの霊につかれていた女から悪霊を追い出しました。それでもうけることができなくなった主人たちが、彼とシラスをローマの長官に訴えました。彼らはむち打ちを受けました。そしてそのまま牢に入れられました。このような惨めな時、「真夜中に、彼らは神に祈りつつ賛美の歌を歌っていたのです(使徒 16:25)。神に祈りました。周りの状況ではなく、神ご自身を見上げ、賛美しました。そのことによって、主が大地震を起こされ、鎖を説かれたのです。

取られたことによって確固たる信仰を持たれた方として、横田早紀江さんがいます。先だって、オバマ大統領の訪日の時にご夫婦でお会いになっていましたが、彼女が信仰を持つことになったのは、娘のめぐみさんがいなくなったことがきっかけです。

めぐみさんの失踪後、悲嘆に暮れていた早紀江さんを支えたのは、早紀江さんの友人とめぐみさんの同級生の母親たちでした。友人がクリスチャンでした。生まれつきの盲人を見て、イエスの弟子がその理由をイエスに聞くと「この人が罪をおかしたのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです」、という言葉を書きました。早紀江さんはこの言葉に不思議な感覚を覚えたそうです。

さらに、めぐみさんの同級生の母親もクリスチャンで、「ヨブ記を読んでみて」と聖書を置いていったそうです。そして彼女が目にしたのが、ここのヨブの言葉でした。「私は裸で母の胎からでた。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。」この厳しい記述の一節に、早紀江さんは事件以来、初めて深呼吸をして空気が美味しいと感じたそうです。「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。私はそれであなたのおきてを学びました」という詩篇の言葉のように、聖書にある言葉を痛みをもちながら、なのこと心地よく染みていくのを感じました。

(<http://kishida.biz/column/2003/20031015.html>)

ヨブのこの言葉は、私たちの魂の解放を与えます。それは人間のついでと、人間を造られた神についての真実を告げているからです。ゆだねた魂を、神はゆるぎないものとしてくださいます。ヨブはこれから、さらにひどい災いを受けます。そして慰めに来た友人と激しい議論になります。しかしヨブは、神を正しいとすることでへりくだり、悔い改めることができました。根底に、主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな、という信仰があったからです。この真実に神を知ることのできる鍵があり、またキリスト者の成熟を全うできる鍵があります。